

# 東久留米市の地盤に関する資料

委員要求資料4

## 第2章 東久留米市の現状と被害想定

### 第1節 東久留米市の概況

#### 1 地勢

##### (3)市の地質

地形が示すように地質もまた極めて単純である。下層部は第四紀に属する関東ローム層であり、低地は河川が運搬して堆積した土砂泥からなる沖積層である。低地を除く他の土地は、浅い腐食層があり、すぐその下は関東ローム層に覆われている。上層のローム層は、立川ローム層に属するもので、次いで武蔵野ローム層となる。両者の厚さはおよそ5～7m前後で、ローム層の下の地層は薄い東京浮石層があり、さらに粘土、砂、礫から成り立っている。礫は武蔵野礫層と、それより粘土の多い上部東京層となっている。

本市各地におけるボーリング(ロータリー式)による調査の結果は以下のとおりである。

##### ア 滝山三丁目(滝山台地の第九小学校校地)

関東ローム層は6.65～6.95mに達しているが、この付近は既に土壌の上層部が削平されており、表面の腐食土とローム層の一部が失われているため、ローム層の実際の厚さはこれより幾分か大きく見る必要がある。ローム層の下部に黄褐色の極めて密度の高い砂礫層が記録されているが、これは武蔵野礫層である。この武蔵野礫層は、隣接した地点で、厚さが1.95～5.85mと大きく変わっている。その下に上部東京層が続いている。

##### イ 下里三丁目(滝山台地上の下里小学校校地)

ローム層は0.2～0.3mの表土の下に、わずか2.45～2.9mの厚さで存在しているにすぎず、その下に下乗古層と思われる0.65～1.3mの厚さを持つ粘性土の存在が記録されている。この粘性土の下には厚い砂礫層が続いており、地表から9m前後の箇所に、0.8～1.1mに達する粘性土の存在する部分が認められる。

##### ウ 新川町二丁目(東京消防庁東久留米消防署新川出張所)

表土は、0.8ないし1.1mに達しており、関東ローム層は約5m、武蔵野礫層は2m前後で、その下層は上部東京層となっている。

##### エ 神宝町一丁目(大門低地に位置する神宝小学校校地)

黒色の表土は約1.1m、その下に約0.5mの厚さの関東ローム層を挟む粘土質シルト層が1.5m前後存在している。以下砂礫層、礫混じりシルト質砂層(上部黄褐色、下部黄灰色)、砂礫層の順になっており、ここが沖積層であることを物語っている。

**ローム層の下方に存在する地層は、武蔵野砂礫層が主体となり、その他、荒砂、浮砂混じりの砂層、小砂利混じりの砂質粘土層(上部東京層その他)などからなり、さらに下層には余り大きくない砂や微細な砂がある。これら深部の地質の概略から想像すると、本市の地盤はかなり強固だといえる。**また、この地層の地質年代は、下層の砂礫粘土質が新世代第三紀、ローム層が洪積世、低地の河岸の水田地域が沖積世である。したがって、本市の地層は第三紀以後のもので、変成岩的又は火山岩的色合は全くない地域である。